

BATTLE BALLER

HARUKA

III

氷の美少女

4 記憶

Ψ

(Eternity Flame)

バトルボーラーはるか

第三集

氷の美少女

第4章

記憶

作・ Ψ (Eternity Flame)

詩音が忽然(こつぜん)と姿を消し、一夜明けた翌日。秀樹にゆっくり休むように言われたはるかだが。詩音の事や鮎吉に言われた事が気になった上に、伍籐(ごとう)との戦いの興奮とが加わり、昨晚は熟睡(じゆくすい)できず寝坊(ねぼう)をしていた。

そんなはるかを目覚めさせるように、インターホンが部屋中に鳴り響いた。誰だろうかと思っただが、寝惚(ねぼ)け顔で玄関に出る訳にも行かず、慌てて髪を手櫛(てぐし)で直しながらドア越しに返事をする、そのドア越しの相手は正友であった。

「おい起きてたのか？」

「何か用なの？」

「昨日はハードな夜だったから寝坊してねえかと思ってよ〜。」

詩音がいなくなったので、自分の部屋に戻ったはるか。その真下の部屋で暮らす正友は、昨日の一連の出来事で精神的・肉体的にも疲れているだろうと、彼なりにはるかに気をつけて来たのであったが。ドアノブを「ガチャガチャ」とガサツに鳴らし、いきなり部屋に入ろうとしたので

「ちょっと何やってんのよ!？」

と、はるかは声を荒(あら)げた。

「いや、一緒(いっしょ)に朝メシ食おうと思ってよ。」

「私は、まだ着替えてもしてないからダメよ！」

「...お前(まへ)やっぱ寝(ね)過ぎたんだな？」

「だから何よ。」

「早く用意(ようい)しないと遅刻(ちこく)すんぞ？」

そう言われ、掛(か)け時計を見たはるか。

「あーッ!!」

始業(しぎやう)に間(ま)にあうバスの最終便(さいしゅうべん)が、最寄(もよ)りのバス停(バスどまり)に来るまで、あと20分(ふん)しかなかった。

(もう休んじやおっかなあ...)

叫(こゝろ)んだ後(のち)、朝イチ(あさイチ)から訪(たづ)ねられたショックに意欲(いよく)が萎(な)えたはるかは、投げやり(なげやり)な気持ちとなり、そんな考え(かんが)をしていたのだが...

「おい、ちゃんと学校行けよ！」

そんなはるかの考えを見透(みす)かしたかのように、正友がそう言って登校を促した。

「...もう間に合わないもん。」

「ちよっとくらい遅れたって、いいじゃねえかよ。オレなんか遅刻なんて当り前にやりまくってんぞ。」

「...何をエラそうに、そんな事言ってるのよ。よくクビにされないわね。」

「余計なお世話だっつーの！...まあ、んな事あどーでもいいや。送ってやるから支度しろよ。」

「えっ!?アンタ車持ってるの？」

「持ってるよ。何か文句(もんく)ある？」

「えっ!?ない...けど...。」

「けど何だよ？」

「運転は大丈夫なのかなあなんてさ。」

「失礼な。んな事ばかり言っていると送ってやんねえぞ！」

「はいはい。じゃあ、ちよっと待ってて...」

そう言って慌てて準備を始めたはるかだが、髪をセットして制服を着たりして身だしなみを整える為、結局30分近くを費やしてしまっていた。車で直接学校へ行くとなれば、逆算(ぎやくさん)すればそれくらいかけたとしても間に合うと踏んだからである。

そこには微妙(びみょう)な女心があって、遅刻はするわ身支度は整えねばイケないわと考えると、急に億劫(おっくう)になっていたのだが、正友の助け舟(ぶね)でなんとか間に合うと思った途端(とたん)にやる気が出てきて、そんな段取りを考え出していたのであった。

「遅えぞ！」

「ごめんごめん。」

「まあいいや。行くぞ！」

正友について行くと、真新しい軽自動車があり。二人はそれに乗り込んだ。

「この車いつ買ったの？」

「この前だよ。」

「いつ納車(のうしゃ)したの？」

「昨日だよ。」

「昨日!？」

「んじゃ、出ば一つ!」

嫌な予感がしたはるかだが、もうバスにも乗れないので、助手席で大人しくしているしか選択肢(せんたくし)はない。

案の定、その予感は当たり。正友の無謀(むぼう)な運転に、はるかは顔を引きたらせた。

「アンタ、免許はいつ取ったの!!」

「ん、先週だな。」

「先週!?!教習所以外で運転したのは？」

「今日が始めてだよ。」

信号待ちでやっと話しができたが、聞かなければ良かったと、はるかは心の中でつくづく思った。

「ちょっと...きやああ〜ツ!!」

ジェットコースターなど及びもしないほどのスリルに、なんとか学校に着きはしたものの、はるかはゲツソリとしてしまっていた。ラッシュ時間なので、スピードはそんなには出ないであろうとタカをくくっていたのだが、裏道ばかりを猛スピードで走られ、生きた心地がしなかった。

「着いたぞ。」

「...死ぬかと思った...。」

そう言って、はるかはよろめきながら登校する羽目に陥っていた。いつもなら怒ったりもするのだが、そんな元気すら失くっていたのである。裏道を飛ばしたお陰で、15分近くも始業時刻より早く教室に入ったはるか。

「あれえー!?!はるか、来てたのー？」

少し遅れて教室へ入った沙織が、はるかを見つけびっくりした様子で近寄って来た。

「...。」

「どうしたのー？ぐったりしてえ...バスで見かけなかったから、今日は休むのかなあって思ったよお。」

「正友に送ってもらったんだけど、運転がメチャクチャで...すごく疲れたの。」

「車で...あっ!?そっかー！はるか、遅刻しそうになったんだねえ？」

「...うん。」

「昨日はハードだったからねえ。」

「...うん。だから、ちょっと静かにしてて...」

はるかは机にもたれかかり、寝そべったまま始業ベルが鳴るまで動かないでいた。しかし、一旦(いったん)HRが始まると、背筋を伸ばし普段通りに授業をこなしていた。

だが、朝食を摂れなかったのと寝不足との疲労(ひろう)で、瞳は開いていても、頭の中では意識が朦朧(もうろう)としていた。英語の授業になると、先生が読む英文が、まるで睡魔(すいま)を呼び寄せる呪文(じゅもん)のように聞こえ、眠気はピークに達していた。そんな折(おり)一

教室の引き戸が突然開けられたかと思うと、廊下(ろうか)から伍籐が姿を現した。

「ブツ殺してええよ!!」

血みどろのナイフを手にし、物騒(ぶっそう)な言葉を吐く伍籐。瞳は血走るというよりも、眼球(がんきゅう)自体が風の谷のナウシカに出てくる怒った時のオウムのように真紅に染まり、それはそれは恐ろしい容貌(ようぼう)をして近づいて来ていた。

気が動転(どうてん)するはるかだが、「やられる!!」と思った瞬間。机の上に銃があったので、とっさの判断で走り寄って来る伍籐へ向けて射(う)つと、数発放たれた内の一発が見事に顔に命中したのだが...

「ギシャーッ!!」

銃声と共に伍籐の首から上が吹き飛んだかと思いきや、中から気味の悪い擬音(ぎおん)と共に触手(しよくしゅ)のような物が、何本も飛び出してきた。慌てて銃を連射(れんしゃ)するはるか。

しかし、伍籐の首から伸びたイソギンチャクのような触手は、怯(ひる)まずはるかの体に絡(から)みついた。そして先が包丁のようになっている触手の内の一本が、はるかの胸に無残(むざん)にも突き刺さった。

「キャアアアアアーツ...!!」

大声で叫んだはるか。気がつくや伍籐の姿はなく、クラスメート達が驚(おどろ)いた様子で、はるかを見つめていた。

「どうしたのお?はるかー。」

「あれ?どうしたんだろ?私...。」

「変な夢でも見たんじゃないのー?」

「夢...?わたし寝てたの?」

「器用(きよう)に教科書立てて寝てたよー。」

「そう...夢だったの...」

はるかはホツとしてうな垂(だ)れた。

「ねえーどんな夢だったのー?」

「うーん...化物(ばけもの)が襲(おそ)ってきて...」

「それでー?」

「そいつを銃で射ったら、なんか首から凄(すご)いのが出てきて...」

「何それー。」

興味津々(きょうみしんしん)だった沙織が、はるかの話しを聞くなり鼻で笑った。

「もーっ。怖(こ)かったんだから、何もそんな風にバカにしたように笑わなくてもいいじゃない!」

「だってえー...そんな人いるワケないじゃなあい。どうせ、ホラー映画でも観たのが夢に出たんでしょー?」

「うっ!?そう言えば...」

「凶星(ずぼし)でしょー？」

沙織はそう言ってニヤリとした。その態度(たいど)が癪(しゃく)であったが、はるかには思い当る節(ふし)があり、詩音と昨日遊んだ時の話を切り出した。

「そう言えば、きのう詩音ちゃんと一緒にやったゲームに、ああいうのが出てた気がする...」

「それってガンアクションでしょー？」

「うん...なんで分かるの？」

「なんで分かるのってー、当たり前じゃなあーい。ホントに単純(たんじゆん)なんだからー...キャハハハ...」

「もー、そんな大声で笑わなくたっていいじゃない...。」

「だってえ〜...アハハハハ...」

「もう!...大体(だいたい)は正友がイケないのよ。女の子にオモチャを買ってあげるのはいいけど、それが男の子のやるような物ばかりなのよ!？」

「正友さんらしいねー。アハハハ...」

「まあ...そうだね。」

沙織につられて、少し笑ってしまったはるか。しかし、ふと、詩音の事を思い出し、ほのぼのとした空気が一転(いってん)して重くなった。

「詩音ちゃん、どうしてるかなあ...。」

そう言って遠い目をするはるか。

「まあーお堅(かた)いコトは、秀樹お兄さん達が考えてくれてるだろうからさー。放課後(ほうかご)にケーキ食べに行こお♪」

はるかもあっけらかんとした所はあるが、沙織の思考(しこう)回路(かいろ)には遠く及(およ)ばない。

「今日はそんな気分になれないな...」

「なんでなんでー？」

「なんでって言われても...昨日のコトが気になって...。」

「そんなあ!?せつかくの週末だよー！他人のコトで悩んだら損だよー！」

「他人事(たにんごと)って、そんな言い方ないでしょ。」

「じゃあ、はるかが悩んだらどうにかなるワケー？」

「それは...どうにもならないけど...」

「でしょー！...じゃあ行こー♪」

「もお～...参(まい)ったな～。」

とは言いながらもー

「ううう～...美味(おいしい)♪」

行ったら行ったで、誘い出した沙織よりも喜んでいる様子のはるかであった。

「来て良かったでしょー？」

「うん...。あっ！アレも頼んじゃおっかなあ～。」

「はるかはケーキ職人(しょくにん)になったらー？」

「?...なんで？」

「だって一スゴく好きそうだしさー。」

「うーん...それもいいかなあ...。」

「進路とか考えてるのー？」

「ううん、なんか実感(じっかん)なくて...」

「もう高2だよー!？」

「沙織は何か考えてるの？」

「うん。私はねーお医者さん。」

「お医者さんかあ...」

「うん。それでねー、はるかんトコの病院で働くんだあー。」

「なんであの病院なの？」

「そしたら秀樹お兄さん達の近くでいられるからねー。」

「そうかあ...。そしたら正友は、沙織を“先生”って呼ぶことになるね。それも面白(おもしろ)いかも。」

「はるかは何かやりたい事とか夢とかないのー？」

二人は県内でも有数の進学校に通っていたが、将来へのビジョンとなると不透明(ふとうめい)であった。

成績(せいせき)優秀(ゆうしゅう)なはるかだが、勉強は大学に入る為だけの知識のような気がし、それが自分の未来に結びつくイメージが沸(わ)かないでいるようであった。

「うーん、やりたいコトかあ...。」

やりたいコトはと聞かれ、それすら答えられないはるか。沙織はそんなはるかのカウンセラーにでもなったかのように、目標を探してあげようとしている。

「じゃあ、一番好きなコトはなあに？」

「好きなコトは...映画を観るか音楽を聴(き)くコト...かな。」

「はるかは映画好きだよねー。じゃあ映画監督で決まり！」

「え〜っ!?ムリムリ。第一、どうやれば映画監督なんてなれるのよ？」

「それは一...大学行って一...映画を作る会社に行けばいいんじゃない？」

「...ホントに楽観的(らっかんてき)ね。あ〜、やっぱ違う世界って感じで現実的じゃないなあ...。」

「じゃあミュージシャンは一？」

「え〜!?なんでミュージシャンなの？」

「だって音楽好きって言ったじゃない！」

「“聴く”のは好きって言ったけど、別に楽器を弾(ひ)きたいなんて言ってないじゃない！」

「じゃCD屋さんで働いたらー？」

「飛躍(ひやく)しすぎだよ...」

突拍子(とつぴょうし)もない事を言う沙織に、呆気(あつけ)に取られるばかりのはるか。だが、反面(はんめん)にその豊かな発想力は欲しいと思っていた。ティータイムを終え秀樹の経営する店に行くと、正友が先に来ている、はるかに話しかけた。

「お、学校はもう終わったのか？」

「うん。アンタ仕事じゃなかったの？」

「今日はちょっと変則(へんそく)シフトで、早上がりだったんでな。」

「そう。」

はるかは沙織に進路について言われた事が気になったのもあり、秀樹に相談したかったのだが。正友に聞かれるのは抵抗(ていこう)があったので控(ひか)えようと思った。

昨日の一件(いっけん)と言い、今日の事と言い。はるかにとっては気の重い話しであったので、解消できず胸に留めるのかと思うと、気がかりを抱えこむようで嫌な気持ちであったが。

「何かあったのか？」

「えっ!？」

正友がふと急に言ったセリフに、はるかは驚きを隠せないでいた。

「...別に。なんでそんなコト聞くの？」

「なんか顔が暗いぞ。」

「そう?...正友でもそんな事を気にするんだ。」

「恋の悩みか？」

「違うわよ!進路の事よ。」

「ほう～進路か。」

「あっ...。」

思わず口を滑(すべ)らせたはるか。聞かれたくない事を、言いたくない相手に言ってしまった事を悔(く)いるかのように、そう声を発(は)してしまっていた。

「で、どうすんだ？」

正友は身を乗り出し、はるかにそう質問を投げかけた。その姿は、相談に乗ってあげる気満々な雰囲気であったが。沙織と性格の近い匂いのする正友に話しをしても、自分にとって参考になるような意見は得られないと、タカをくくっているはるかは、あまり乗り気でなく、あからさまなダンマリを決めこんだ。

「何だよ。何もねーのかよ。」

正友はそう言って、いい若い者が、夢や目標の一つもねーのかよ的なイントネーションでそう言ったので、はるかはムキになり—

「アンタは何で看護師(かんごし)になったのよ？」

と、逆質問をした。

「ん!?...なんでオレの事を聞くんだよ？今、質問してんのはオレなのによ！」

「“先輩”が進路を決めた理由を参考にさせて欲しいのよ。」

「ほう、なかなか殊勝(しゅしょう)な心(こころ)懸(か)げだな。よろしい、じゃあ答えて進ぜよう。」

「...いつの時代の人よ。」

「エヘン、讃岐(さぬき)の山ピーことオレ様はだなあ...」

「前置き(まえき)はいいから。」

と、呆れる(あはれ)るはるか。

「話(わ)しの腰(こし)を折(よ)るなよ。オレは人と接(あ)するのが好き(す)きな。んで、人に感謝(かんしゃ)されたりするのも好き(す)きだし、そう考えたら医療(いりょう)関係(かんけい)(いりょうかんけい)かなって思(おも)ってよ。」

「ふうーん。」

「なんだよ？そのつまらなさ(つまらなさ)そうな相(あい)づち(づち)はよお。」

「いや、案外(あんがい)フツー(ふつう)だなあと思(おも)って...」

「どういう意味(いみ)だよ？」

「女(おんな)の人に困(こ)まれて仕事(しごと)がしたい(したい)とか、そんな辺(へ)りが理(り)由(ゆ)かなあ(かなあ)なんて思(おも)ってたから...。」

「そうそう...お花畑(おはなばたけ)のナースステーション(なースステーション)...ツて、なんでやねん！」

「...意味(いみ)分(わ)かんない。」

そう言い、やっぱり相(あ)談(だん)するだけ無(む)駄(だ)だ(だ)ったな(な)あ(あ)的(てき)な表(ひょう)情(じょう)を、はるか(はるか)がした。

「ま、オレの事(こと)はさておき。お前(まえ)はど(ど)ーす(す)んだ(だ)よ？」

「それが分(わ)かんないから考(かん)えてる(る)ん(ん)じ(じ)ゃ(じゃ)ない。」

「考(かん)える(る)のはいい(いい)けど(けど)よ(よ)お。そ(そ)ろ(ろ)そ(そ)ろ(ろ)方(か)向(きやう)性(せい)く(く)ら(ら)い(い)搾(しぼ)っ(っ)と(と)い(い)た(た)方(か)が(が)いい(いい)ん(ん)じ(じ)ゃ(じゃ)ね(ね)え(え)か？」

なん(なん)か(か)ね(ね)え(え)の(の)か(か)よ(よ)、や(や)り(り)たい(たい)事(こと)と(と)か(か)夢(ゆめ)と(と)か(か)よ(よ)お。」

「夢(ゆめ)か(か)あ...美(み)味(み)しい(しい)ケ(け)ー(え)キ(き)が(が)い(い)っ(っ)ぱ(ぱ)い(い)食(た)べ(べ)たい(たい)な。」

「そう(そう)か(か)！なら(なら)菓(か)子(し)(かし)職(しやく)人(にん)(しやくにん)に(に)な(な)れ(れ)よ。」

「...沙(さ)織(お)と(と)同(どう)じ(じ)コ(こ)ト(と)言(い)う(う)ね。」

「ん!?なら、グルメリポーターになれよ。キミマロみたいにし、決めゼリフみたいなの考えてTVでコメントするんだよ。まさに〇〇のなんたらかたらや~とか言ったりゃいいんだよ。」

「...。」

言ってる事が抽象的(ちゅうしょうてき)過ぎて、もはや言葉も返せないはるか。

「おいおい...そんな話し方じゃ、分からないだろ！」

奥の部屋で二人の話しを聞いていたのだろうか、秀樹がそう言いながら現れた。

「進路で悩んでるのか？」

「そういう訳じゃないんだけど、沙織とそういう話しにたまたまなって...。自分は何がやりたいのかなあって思って...」

「はるかは頭が良いから何でも選べる。それが仇(あだ)になって進路を決めかねてるんだな。」

「そうなのかなあ...」

「沙織ちゃんは何て言ってるんだ？」

「お医者さんになるって。」

「そうか。沙織ちゃんはしっかりしてるな。お前も来年の今頃には、自分の進む道への準備をしなきゃイケないんだから、もうそろそろ考えないとな。」

「うーん...。」

「別にそんな難しく考える事ないんだよ。やりたい事があるならそれ専門の学校に行くとか、やりたい事が見つからないのなら、それを見つける為にとりあえず大学に進学するとかだな。大卒(おおわく)だけでも考えとかないとな。人それぞれに早くから自分の道が分かる者もいれば、そうでない者もいる。比べなくてもいいから、自分のペースでやればいいんだ。」

「...海外(かいがい)留学(りゅうがく)がしてみたいな。」

「おーそうか。それなら、先生や鮎吉師匠に話しをして、どうすれば留学できるか考えればそれでいいんだ。そうやってる内に、やりたい事も見つかるさ。」

「...うん。」

「まあじっくり考えるといい。だいじな事だからな。」

物事に対して、わりと論理的に考えるはるかは、秀樹の言葉を聞いて安心をしたようであった。正友や沙織は自分の好きな事をパツと心で感じ、即座(そくざ)に行動するタイプなので、はるかが何を悩んでいるのか理解ができず、自分と同じように決めさせようと急かしたのだが、はるかは色々と自分の可能性を知った上で、結論を出したいと考えていたので、かみ合わなかった。

沙織と正友のペースに呑まれ、知らぬ間に自分も進路に対して、明確なビジョンを持たねばならないのかという心理状態になり焦っていたが、同じ考えをしてくれる秀樹の存在がいて落ち着く事ができた。

「はあ〜。」

安心すると、思わず溜(た)め息(いき)が漏(も)れた。

「どうした？」

不思議そうな秀樹。

「えっ...ああ、沙織と正友みたいに、はっきり自分の進路を決めなくちゃイケないのかなあって思ったんだけど、お兄ちゃんの言葉を聞いて安心したの。それで、正友もお兄ちゃんくらい、人に合わせた会話をしてくれればいいのにとあって...。」

「なんでそう思ったんだ？」

「だって、相談してみろみたいに話しを振って来たから、進路について話したのに、考えてくれた答えが“キママロになれ”よ。ホントに訳分かんない。お兄ちゃん、そう思わない？」

「...確かにその話しに関しては、ワケが分からんな。」

「でしょ。お兄ちゃんくらい、正友もしっかりしてくれたらなあと思って...。」

それを聞いて正友は、「余計なお世話だ！」と言り返した。

「大体、“お前がケーキが好き”って言うから、ケーキ職人になれたのに、他にないのかって聞くからそう言ったんだろが！」

正友は少し「ムッ」としたのか、早口(はやくち)にそう言った。

「“キミマロ”さんは男の人だし...」

冷ややかに、はるかはそうツッコミを入れた。

「じゃあ、ギャル曽根(そね)みたいになれ！」

「馬ッ鹿じゃないの！」

二人の喧嘩(けんか)が始まりそうだったので、秀樹は、「またか」という顔をしながらも仲裁(ちゆうさい)に入った。

「正友、お前の言ってるコトは短絡的(たんらくてき)過ぎて、アドバイスになってないぞ！それじゃ、相談相手は馬鹿にされてるみたいに聞こえるじゃないか。」

はるかは全くその通りだと頷(うなづ)いていたが、そんなはるかにも、秀樹は注意をした。

「それにはるかもだ。正友はしっかりしてないみたいな言い方をしたが、俺はそうは思わないぞ！一人前って言葉の意味は、誰にも迷惑をかけないってコトだと師匠が言ってたが、俺もそう思う。正友は誰の世話にもならず、働いて生活してるんだ。だから立場としては、お前よりも上だぞ。」

「それ見ろ！」勝ち誇る正友。

「正友、そうやってお前は調子に乗るな！社会人なんだから、今、言ったコトなんて当り前だぞ！」

秀樹はそう言って、正友を叱(しか)ったが—

「まあ当り前のコトが、人間なかなかそれが出来ないんだがな。」

褒められたのに、すぐドヤされ少しへこんだ正友を見て、またすぐにフォローをする秀樹。はるかは自分の言葉が過ぎたのを指摘(してき)され、秀樹に謝(あやま)ることにした。秀樹の公平(こうへい)さと優しさに、心を打たれたからである。

そうしてこの話題は打ち切り、もう一つの気がかりについて、はるかは話し出した。

「お兄ちゃん、詩音ちゃんのコトは何か分かったの？」

「...それがな。分からないと言うか、一旦(いったん)は気配を確認したんだが...」

「どこで？」

「北欧(ほくおう)なんだが...俺の放った水ホタルが壊されてしまってな。それからはどうにも居所(いどころ)が掴(つか)めない。」

「!?...詩音ちゃんがやったのかしら。」

「...おそろくな。俺の内力(メキド)を内力で打ち消したんだろう。」

「詩音ちゃんは、あの悪そうな人達の仲間になっちゃったのかな?...」

「うーん...分からんな。まあいずれにしろ、ソロモン王の秘宝が目当てだと言うなら、俺達の元へ来るだろうから、消息(しょうそく)が分からなくなろうがどうだろうが、その時はとことんまで話し合うまでだ。」

「でも...」

「でも何だ?」

「でも、何で詩音ちゃんの心境(しんきょう)は、急変(きゅうへん)したのかしら。」

昨日までの可愛らしかった詩音が、何故(なにゆえ)に自ら秀樹の付けた発信機を拒(こぼ)むなどして敵意を表すのか、はるかにはそれがどうしても理解できないでいた。

「伍藤って男は内力が暴走して、血がたぎるのを抑制(よくせい)できなかつたようだが、詩音ちゃんはまた別の人間になったような印象を受けるな。」

と、はるかの疑問に秀樹がそう答えた。

「別の人格ってコト?」

「ああ。詩音ちゃんの血の中に眠る何かが、内力(メキド)に触発(しよくはつ)されたという感じがするな。はるかだって、フェニックス心拳の技を自分が編み出した訳じゃないだろ?先代から伝わった技が、内力の発達に供って自然とイメージされ発揮(はつき)できた、俺がそうである様にな。そして発揮された技を形容(けいよう)する“名”を、自分がそのイメージに沿って名付けた。」

「...そうね。」

「それと一緒に、ケースは違うがそんな類(たぐい)の何かが起こったんだろう。どっちにしても俺達に反目(はんもく)するってコトは、少なくとも詩音ちゃんの身には害(がい)が及んでないと考えていいだろうし、その内に俺達の前(まへ)に表れるのは明らか(めいらか)だろうから、その時まで待つしかないな。」

「でも…」

理屈では分かって、割り切れないでいるはるか。

「“でも”はもういいだろ？考えるのは結構だが、悩んだり焦って浮(う)き足(あし)だっても、時が来るまではどうにもならないコトだってある。今の場合が正しくそう。その時にならないと、どんな事態が起こってるのかさえ把握(はあく)できない状況なんだから…今はグッとコラえてるしかないだろ？」

「それは…そうけど…」

「だろ？だから、もし今度詩音ちゃんがお前の前に表れたなら、その時は自分の良心に恥じない行動を取ればいいんだ。相手を想う余り、その想いに捕われていたんじゃ何も出来ない。人間はずっと緊張し続けるなんて出来やしないんだ。そんなに悩んだり張(は)り詰(つ)めると、いざという時に冷静な判断や行動が取れないぞ。だから、詩音ちゃんの事は完全に消すのは無理だろうが、今は頭の隅(すみ)に止める程度にして息抜きをするんだ。」

その言葉を聞いて正友が小声で、

「まゆみさんとの事で経験してるから、説得力があるな。」

と、ボヤいた。

「なんか言ったか？」

地獄(じごく)耳(みみ)の秀樹。

「いや、何も言ってないよ!それよりはるかよお。お前、秀さんが言ったコトに対して返事は？」

「えっ!?うん…ありがとう、お兄ちゃん。」

「よおーし。じゃあ、さっそく息抜きと行こうか。」

はるかが秀樹への返事を言い終わると、正友は待ってましたとばかりにそう言った。

「ドコに行くのよ？」

「息抜きっていったら、カラオケに決まってるだろが！」

と、はるかの間に、いきがりながらそう言い切る正友。何故(なぜ)、そう断言(だんげん)するのかと言おうかと思っただが、面倒臭(めんどくさ)かったし代案(だいあん)も無かったので、はるかは黙って従(したが)う事にした。

カラオケ店に訪れると、部屋に入るなり曲目を機械に入力し、立て続けに歌った正友。事前(じぜん)に連絡(れんらく)を入れていたのか、少しして功一と沙織が入室してきた。盛り上る中、一人だけ静かなはるか。秀樹は遅れて来るとのことで、それが余計に彼女をつまらなそうにさせていた。

「おい、歌わないのかよ？」

そのノリの悪さに、正友が何か歌えと迫った。仕方なくと言った感じで歌い出したはるかだが

...

「お前の歌はつまらん！」

と、正友が大滝秀二風(おおたきひでじふう)に、はるかの歌いっぷりを斬って捨てた。

「何がつまらないのよ！」

ムツとするはるか。

「感情が籠(こも)ってねーんだよ。全然、楽しそうじゃねえじゃんか！」

「ほっといてよ。」

「おまっ...何だその言い方は！」

「アンタが先に気分が悪くなるようなコト、言うからじゃない。」

売り言葉に買い言葉で、険悪(けんあく)なムードのはるか正友。そんな二人を功一と沙織がなだめたが、またしばらくすると、二人は言い合いになったので、功一は頭を使い、正友に酒を飲ませる事にした。

ジンジャーエールと偽って、モスコミュールをどんどん飲ませ、上機嫌となったホロ酔いの正友。次第に歌は減っていき、語らいへと場の雰囲気(ふんいき)は移行(いこう)し、宴会(ばんかい)っぽくなるのにそう時間はかからなかった。

おもしろい小噺(こばなし)を順(じゆん)にしていこうと正友が言い出し。「じゃあ正友さんから～」と沙織に言われたので、どんな話(わたり)が出るのかと思えば、それは秀樹の事だと正友は前置きをした。

「ちょっと前なんだけどよお〜。マック行ったらさ、いつもチーズバーガーくらいしか頼まないのにさ、きのこクリームエビフィレオを頼んでよオ。なんでかつつたら、エビちゃんの写真入りマックカードが欲しいんだからだってよ。」

「それの何がおもしろいのー？」

沙織はそう疑問(ぎもん)を投げかけたが。

「いや、これからがオチなんだけどよ。」

と、正友は嬉しそうにそう答えた。

「んで、秀さんは食べ物の好き嫌いとかはあんまねーんだけどよ。実はエビだけは苦手なんだ。だから黒ゴマ入りとか、歴代のエビフィレオはあったけど、決して頼まなかったんだよ。それでオレもどんなになるのかと思ってたらよ...青ーい顔してこーんな顔になってんだよ。」

“こんな顔”を正友がして見せると、そのマヌケな感じの顔マネを見て、功一は爆笑(ばくしょう)をコラえていた。はるかとは沙織も笑いそうなのでうつむいていたが、笑いを止めようとする反動(はんどう)で体が小刻(こきぎ)みに震えていた。それを見て、気をよくした正友。笑いを我慢(がまん)している三人にトドメを刺(さ)そうと、彼はとっておきのオチを自信満々に話した。

正友は自分の話しに皆が爆笑をコラえているものだと思い込んでいたのだが、実の所そうでないコトに間もなく気付く事となる。

「んでよ。結局マックカード当たなくてよ。こーんな顔で残念そうにしてるからよオ。マックカードの写真と同じポスターが額に入って壁にくっついてたんで、オレが“そんなに欲しいんならあのポスター貰(もら)えないか店員に交渉(こうしょう)してみたら？”って言ったらよお、恥(はず)かしかがっちゃってモジモジしてやがんの。」

もう限界といった感じのはるか達三人。正友は、増々気分を良くし、絶対に笑わせようと勢いよく話した。酒に酔っているとはいえ、真後ろに立ち尽くす男の影に全く気づいてないようで、はるか達はそれがオカシくて笑いをコラえていたのだが...

「そんでな。蚊の鳴くような声で“ポスター頂けませんか？”って、勇気を出して言ったんだけどさ。店員がバイトの女の子だから何とも言えないって顔してさ。そしたら秀さん、顔を真っ赤にして“もういいです”つつて逃げ帰るようにマック出てってよお。引き戸なのに押して出てこうとして、モロにぶつかってさ...」

「それでそれで？」

「おうそれでだな...ん!？」

正友にオチを催促(さいそく)した声。正友はその声に応じて、最後のオチを言おうとしたのだが。自分の前にいるはるか達からではなく、後ろから声が聞こえたような気がし、後ろを振り向くと...

「げえ〜ッ...秀さん!？」

「どーも、エビちゃんの写真入りマックカード欲しさにきのこクリームエビフィレオ頼んだ男です♪」

『アッハッハッハッハー』x3

正友の驚いた顔も面白かったが、秀樹の皮肉たっぷりの卑屈(ひくつ)な態度が、後で覚えてろよという復讐(ふくしゅう)心(しん)が露骨(ろこつ)に伺え、はるか達三人の大爆笑を誘っていた。

「秀さん、これは...その...違うんだよ。」

「何を言ってるんだ？正友。俺は秀さんじゃなくて、海老(えび)フィレ男(お)だろ♪」

「あ〜ッ！...だから、も〜許してくれよ！秀さ〜ん。」

「えっ!？エビちゃんの写真入りマックカード欲しさに、きのこクリームエビフィレオ頼んだけど当たなくて、壁に貼ってあるエビちゃんポスターくれって、アルバイトの女の子に怖い顔した男はヒデ（秀）え奴だっけ言いたいのか？」

「そんな事、言っていないよオ〜。も〜...とりあえずごめんなさい！なあ〜もう許してくれよ。」

困り果てた様子の正友を見て、ようやく秀樹は皮肉による言葉(ことば)責(ぜ)めの矛(ほこ)を取めたが、一気に酔いが醒(さ)めたようで、正友の顔色が青ざめていた。

気の毒であったが、その光景がオカシく、はるか達は笑っていずにはいられないという矛盾(むじゆん)を表情に抱えてしまっていた。

「くそお～皆してオレを騙(だま)しやがってえ...。」

正友は笑っているはるか達を恨めしそうに見て、そう愚痴(ぐち)をこぼした。

「ん!?何か言ったか？」

そんな正友に気付き、秀樹がそう聞き返したが。ヘタな事を言ってまた秀樹の気分を害(がい)しては、たまった物ではないと思い、正友は口をつぐんだ。美優にやられた“おでん”の一件。つい数日前の苦い体験のような事だけは、勘弁(かんべん)して欲しかったからである。

秀樹は取り澄(す)まし、何事(なにごと)も無かったかのようにしていたのだが...。正友が歌っている間に、インターホンで皆の飲み物を注文していた。そこまでは普通だったのだが、エラく長い間を注文に時間を費していた。やがて、しばらくするとテーブルに飲み物が届いたのだが—

「ジュース頼んどいたから。正友はジンジャーエールだったな。」

「お、秀さん気が利くなあ。ちょっと緊張もしたし、歌も歌ったから丁度ノドが乾(かわ)いてたんだ。頂きまーす♪」

そう言って嬉しそうな顔をし、勢いよく飲みかけた正友だったが・・・

「ウツ!?ブフォアアーツ...な、なんだコレ？不味(まず)いッ...ウオ!!...ゲエーツ」

凄まじい勢いで口からジュースを逆流(ぎゃくりゆう)させてしまっていた。

「どうしたんだ？おい。」

白々(しらじら)しく尋ねる秀樹。

「どーしたもこーしたも...秀さん、これジンジャーエールじゃねえだろ！一体、何入れたんだよ!!スゲェ不味いよ!？」

「いやあ～ジンジャーエールっていったら、我が家ではこの飲み物の事を言うんだよ。え～...お酢に白醤油(しろしょうゆ)にガムシロップ。...あとはそれをクラブソーダで割って、こしようにサラダ油を加えれば出来上がりだ。」

「“出来上がりだ”じゃねーよ！そんなん飲めるワケねーじゃんかよ！見えすいた嘘をつかないでくれよお～」

「ハハハ...悪い悪い。さっきのマックカードの事が気になってな。そのことを考えてる内についヘンな物を混入(こんにゆう)してしまった。」

「も～それは言わないでくれよお～...分かったよ、これで許してくれよな！」

「ああ。分かった分かった。」

「うえ～...気分が悪くなった。...ちょっとトイレ行ってくる...」

正友がいる間は、はるか達は彼を労わったりして無関係を装っていたが、秀樹が何か仕掛けをしていたのを知っていたのは明らかで、そういう意味では共犯者(きょうはんしゃ)であった。正友がトイレに向かうと言って部屋から出ると、一斉(いつせい)に全員が大笑いをしていた。

「秀さん、ヤバいッスよ！」

「ちょっとやり過ぎたかな...まあ、面白かったから良しとするかな。」

「いやあ正友さんには気の毒でしたけど、はるかちゃんが、あんまりカラオケを楽しめなかったみたいなんで、いい余興(よきょう)になりましたよ。」

功一は、自分なりにこのカラオケ店での一連の出来事の感想を言ったのだが、はるかの視線を気にして、それ以上は具体的な話しには触れなかった。

「...はるか。お前、楽しくなかったのか？」

「...そういうワケじゃないんだけど。」

「まだ詩音ちゃんの事とかで悩んでいるのか？」

「ううん。正友が妙にハシャギ過ぎてるから、わたしが暗くなってるように見えただけよ。」

「そうか。まあでも、正友くらい明るくなるのも必要だぞ。お前は女の子だから、あそこまでなれとは言わないがな。お前は年の割(わり)に妙に落ち着き過ぎている。さっきも言ったが、ハメを外して心をリフレッシュさせるのも精神(せいしん)衛生上(えいせいじょう)必要な事なんだからな。」

「うん...分かってる。」

「でもまあ、正友が今日は笑わせてくれたから結果オーライでいいんだけどな。」

「どういう事？」

「笑ったからストレスも発散(はっさん)できただろ？」

「...でもあれは正友が狙って面白くしたんじゃないかと、お兄ちゃんが居て面白い展開になったんじゃないの？」

「結果的にはそうだが。正友は、普段から嫌(いや)みたらしくない程度に人の陰口(かげぐち)を言ったり、からかったりする遊び心がある。そういう事を日常的にやってストレスをうまく発散させてるんだ。人の話しや噂に加わったりして、色んな事に好奇心を持つ。そうして人をイジって人生を楽しもうって言う遊び心が、今日みたいな思わぬ事態(じたい)を自分に招き、時にはビックリするような事を引き起こす。そこで自分が笑ったり笑われたりするんだが、自分が楽しむって事は人も楽しませるって事と一対(いっつい)だと分かっているから、こんな事態も全てをひっくるめて楽しめられるんだ。そういう点では、正友はお前より大人というか社交性(しゃこうせい)に長(た)けてる。お前は真面目過ぎるトコがあるから、少しは見習った方がいいぞ！」

「...うん。」渋々、うなずくはるか。

正友の方が自分より優(すぐ)れてると言われたのが、秀樹が言った事とはいえ、受け入れられていない様子であった。

「...お前はまだどこかで正友を認めてないようだな。アイツは伊達(だて)に俺達のグループの中で、俺に次(つ)ぐ立場にいるわけじゃないんだぞ！」

はるかの態度にピンときた秀樹が、そう言ってはるかをたしなめようとした。

「ふーん...そうなの？」

あまり関心を示(しめ)さないはるか。

「もっと多角的(たかくてき)に物事を考えろとは言わないが、もう少し自分と違うタイプの人間についても、認める心を持たないといけないぞ！」

「お兄ちゃんは正友には優しいんだね...。」

「な、何を...俺は誰に対しても公平だぞ...。」

ほんの些細(ささい)な反論であったが、はるかがそんな事を言うとは思っていなかったのので、秀樹は少し動揺していた。だが、タイミングよく正友が帰って来たので、その話しには触れな

いでいられた。

「いやぁ～おまたせしました。主役不在で寂(さび)しかったでしょ？」

「いえいえ...結構おもしろい物が見れたよ～♪」

秀樹とはるかのやりとりを見ていた沙織が、意地悪そうにそう言った。

「何なに？」興味津々(きょうみしんしん)の正友。

はるかはソファから立ち上がりー

「正友、歌いなさいよ。」と、言った。

打ち開けたワケではなかったが。はるかが秀樹に対し、尊敬という感情よりは、むしろ恋愛感情に近い憧(あこが)れを抱(いだ)いているのを、友人の立場で沙織は薄々(うすうす)と感じ取っている。

それが分かってるからこそ、今さっきの二人の会話が面白いと思えるのであって、これ以上に話しが進展すれば、いずれ秀樹にその感情がバレてしまうかとも思うと恥しく、はるかは慌てて話しを浴(あ)らそうとしたのである。

「え～っ...オレにオモシロい話し聞かせてくれないの？」

「そんなおもしろい話しじゃないわよ。」

正友の好奇心(こうきしん)を必死に他所(よそ)へ向けようとするはるか。そのしぐさが、余計に正友の興味をそそった。

「え～ッ聞かせろよオ～。」と、駄々(だだ)をこねる正友。

「正友さんにはオモシロくないかもー。」

沙織がそう言うと、余計に何なのか気になった正友。

「ちょっと沙織いー!？」

と言って、はるかは少し怒っていたが。

「正友さんに今度はどんなイタズラしようかと話してたの♪」

はるか的心中(しんちゆう)を察した沙織が、機転(きてん)を利(き)かしてくれたので、

「んだよオ～...聞いて損(そん)した。」

期待が膨(ふく)らんでいただけに、正友はつまらなさそうにそう言った。それを見て、胸を撫で下ろしたはるかであった。

「ま、いいや...皆で飲み直そう。」

「そのジンジャーエールをまた飲むのか？」

秀樹がさらりと、意地悪な質問をした。

「...んなワケないじゃんか！」

「何か頼んだのか？」

「うん。トイレの帰りに頼んどいたんだ。」

正友にしては妙に用意がいい事に、何か企んでいると秀樹の勘(かん)が告(つ)げていた。

「秀さん、コーラで良かったんだよな。」

「ああ。お前もコーラか？」

「おう。じゃー乾杯しようぜ。」

店員が運んで来たソフトドリンクを皆に配った正友。いつもなら、そんな世話を甲斐甲斐(かいがい)しくしたりしないのにと考えた秀樹は、自分の勘(かん)に間違いがないのを確信し—

「その前に歌を入れよう。」

と言って、正友に乾杯(かんぱい)の音頭(おんど)を取らせなかった。

「先に飲もうよ！」正友はそう言ったが、

「乾杯したら、すぐに伴奏(ばんそう)がかかって歌に入った方が盛り上がるだろ？」

と、秀樹ははぐらかし、言われてみればその通りだったので正友は—

「じゃあ、オレが一曲歌うよ。」

と、リモコンに目線(めせん)をやり、楽曲を選んだ。そのわずかな時間に、秀樹は自分の手許(てもと)に置かれたコーラを正友の物とすり換えていた。

「んじゃ、改めましてカンパーイ！」

しきり直した乾杯。正友の音頭で、皆が一斉にソフトドリンクを飲み出した。

(ふふふ。秀さん、どんな顔するだろ...)

グラスを傾けながら、正友は頭の中でそう思い、一人、勝ち誇っていた。正友はさっきの仕返(しかえ)しにと、密(ひそ)かに秀樹のコーラだけ違う中身に変えさせていたのである。もちろん中身はとびきり不味くして...

だが、実際は自分がそのマズい飲み物を手にしているとは思っても寄らずにいた。カラオケボックスの薄暗さと酔いもあったが、本人自体の油断(ゆだん)が最も影響している。

「ウボフェア〜ツ!?...何じゃこらあああ〜...!!」

予想だにしない激(げき)マズ偽(にせ)コーラを飲んだ正友は、驚いて思いつき口からそれを逆流させていた。

「...もう。汚いわねえ...」

その様子を見て、不快感まる出しのはるか。功一と沙織は、正友のリアクションに大笑いしている。

「なんだコレ!?...なんでこんな不味いモンがオレに...？」

「コーラを頼んどいたんじゃなかったのか？」

取り乱す正友に、いきさつを知っていながらも、秀樹は意地悪くそう言った。

「そうそうコーラ...頼んだんだけどなあ...秀さんは何ともねえの？」

「俺のは普通だよ。」

「そっかー...オレの腐ってたのかなあ...。」

苦しい言い訳をする正友。これ以上我慢できず、秀樹は笑いながら全てを吐露(とろ)した。

「...なんだよ〜。」

すべてを知った正友は、情けなさそうなイントネーションでそう言って悔しがった。

「お兄ちゃんに一杯喰(くわ)うそうだなって十年早いだよ。」

はるかは飽きたようにそう言ったが、あまりにも正友の行動がくだらなかったので、言い終えた後で可笑(おか)しくなって笑い出していた。

その笑いは伝染(でんせん)し、やがて大きな渦(うず)と化した。ひとしきり笑った後、頂点に達したお祭り騒ぎが元のムードへと収束(しゅうそく)し始めると、それにもなって冷静になったはるかが、現実(げんじつ)に立ち返る話しをしだした。

「こんな事してていいのかな...。」

宴会(ばんかい)の終わりが近づく中。ポツリと言ったはるかの一言(ひとこと)に秀樹(ひゆき)が反応(はんおう)し、場(ば)は急速(きゅうそく)に鎮(しず)まりだした。

「だから考えても仕方ないって秀さんが言っただろが！」

正友(ただとも)は、先程(さきほど)問題(むだん)になった詩音(しおん)の件(けん)をはるかは言っているのだと思い、そう結論(けつろん)を告げたのだが。

「...ううん。そうじゃないの。」

正友(ただとも)は外野(がいや)だと言わんばかりに、はるかは秀樹(ひゆき)の方(かた)を向きそう言った。

「うん!?何か他に問題(むだん)があるのか？」

「“氷(こ)の一族(いちぞく)”についてなんだけど...。」

「?...それがどうかしたのか？」

「昨日(けふ)、会(あ)った人(ひと)達は、すごく敵意(ていきい)ムキ出しで、多分(たぶん)また襲(襲)ってくるんでしょ? そうなったらそうなった時(とき)だみたいなコト、お兄(おにい)ちゃん(ちゃん)は言(い)ってたけど。なんかあの人(ひと)達(たち)、わたし達(たち)普通(ふつう)の人間(にんげん)よりは力(ちから)とかが断然(だんぜん)ありそうだし、もっと修業(しゆぎやう)しないとイケないんじゃないのかなあなんて...。」

「チャン・リンシャンと戦(たたか)った時(とき)みたいにか？」

「...うん。」

「実はな...もうお前(まへ)に教(おし)える事(こと)はないんだ。」

思(おも)いがけない秀樹(ひゆき)の言(い)葉(は)に、「はっ」とした表(あらわ)情(じやう)をすするはるか。

「そして...これ以上(これいじやう)、激(げき)しい修練(しゆれん)をすする必要(ひつよう)もない。」

「えっ!?...どうい(どうい)う意(い)味(み)なの？」

「今までの修業と度重(たびかさ)なる激闘とで、体術ならびに技量などは成長しきったという事だ。まあ、基礎は全て習ったと考えればいい。道場で言えば免許皆伝(めんきよかいでん)って所かな。あとは心・技・体の中の“心”。それを自分で自分を見つめながら探していけばいい。」

「...心？」

そう言って、きよとんとするはるか。

「“心の有(あ)り様(よう)”ってコトだ。見えない心をどう見つめ、どうやってその位置を知り定めるのか。雲を掴むような話しに聞こえるかも知れんが、それは俺や鮎吉師匠でさえも定めてやれる物ではない。自分で知ってく物なんだ。だが、焦(あせ)る必要はない。いずれ選択を迫(せま)られる時が来るだろう。」

「選択...？」

「ああ。知性と感情からなる精神世界を彷徨(ほうこう)する“心”。その心からバトルボール(神気珠玉)の力は発動される。“心の有りよう”とは、その指向性(しこうせい)というか...簡単に言えば、自分が心から想った事や考え方が未来の自分の姿になるってことだ。」

「うーん...」

「端的(たんてき)に言えばだ。お前はさっき高校卒業後の“進路”について俺に相談した。じゃあ進路は何が決めるんだ？」

「私の...心？」

「そうだ。自分の進路。すなわち未来とは、自分の事なら自分で決めるように、はるかならのはるか。正友なら正友のそれぞれの道があり、他人にどうこう言われるものじゃないだろ？自我(じが)とか意識とか色んな呼び方はされてるが、早い話が自分の心が思った事を実行した結果が未来になってくんだ。」

「そうだね。何か分かるような気がする。」

「その先が分かるか？」

「ううん...なんとなくしか...。」

「お前はやはり頭の良い子だな。まだ上手く話せないんだろうが、今、聞いた話を水平展開(すいへいてんかい)して、自分なりに理解しようとしている。俺は先輩としての経験から、お前に助言しているだけなんだから、ちゃんとまとめて話そうとか伝えようとかしなくていい。“心”とは感じる物であって、雄弁(ゆうべん)に語る為の道具ではないからな。今ある環境、直面する状況、そこから導き出す自分の心。それは自分の未来の姿となる。そして—」

「そして何なの？」

言葉に詰(つ)まった秀樹に、はるかはその先を聞こうと尋ねたが、秀樹はすぐに応えようとせず、慎重(しんちょう)に頭の中で言葉を選んでいるようであった。

「そして...力を超える力を得る為の“心”に辿(たど)りつくんだ。精神の世界は宇宙のように広大で、しかしながら目には見えない。なのに、どうして自分の心の有りようを定め、力を超える力に結びつけるのか。そもそも心の有りようとは何なのか。それすらも今は分からないだろうが、それは自分で幾(いく)ら考えても分かる物ではない。いずれ選択を迫られると言ったが、それまではな。時が来ればお前の前に現れる試練。今までは、お前はそれに負ける事なく頑張(がんば)って来た。これからも正しい道を歩んでくれ！」

「うん。できる限りそうしたいんだけど...。」

「何か問題があるのか？」

「問題というか...まゆみさんはどんな選択を誤(まち)って、ああなったのかなあ...。」

「...さあな。あの女(ひと)は、何も語らず俺達の前から姿を消したからな...。それがどうかしたのか？」

「まゆみお姉さんの事情が知りたいってワケじゃないんだけど...わたしの知ってるお姉ちゃんは、聡明(そうめい)で優(やさ)しくてとっても素敵(すてき)な女(ひと)だったわ。まだ小っちゃかったから、臃(おぼろ)げな記憶(きおく)なんだけど...。少なくとも悪い事を考えたり、しでかしたりするような女(ひと)じゃなかったと思うの...。」

「ああ...そうだな。」

まゆみの事を思い出したからか、秀樹は少ししょげているように見えた。それを見て、胸が締(し)めつけられる感覚に陥(おちい)るはるか。しかし、直視したくない状況にありながらも、秀樹に、今の自分の不安を話したくて言葉を止められないでいた。

「まゆみお姉さんは悪い人じゃないのに、何で力を失ったのかと思って...。」

「...なるほどな。」

はるかが、どういう意図でそういう話しをしているのか分かったらしい秀樹は、そう言った後、ため息をつくかのように瞳を閉じ俯(うつむ)くと、一呼吸(ひとこきゅう)置き、思いを断ち切ったかのようにして再び語り出した。

「確かにはるかの言う通り。まゆみは、欲ボケしたりする女じゃないし、悪どい人間なワケでもない。だが...それだけが人間の問題ではない筈(はず)だ。そうだろ？」

「うん...そうだね。」

「なら一体、何が原因で“聖なる力”と言われるフェニックス心拳の継承者たる資格を失ったのか？つまりお前は、自分もまゆみと同じ失敗を犯してしまうのではないかと危惧(きぐ)してるんだろう。はるかもまゆみも、人を押しのけたり陥しめたりしてまで、富や権力を求めるような人間性はしてないと俺も思ってる。だが、お前の前任者(せんになんしゃ)であるまゆみは、それにも関わらず力を失った。自分も同じようになるのではないかと思ひ、まゆみの事が知りたいたいんだろうが、その事に関しては、はっきり言えと言われても俺にも詳細は分からないとしか言えない。心の問題とは口で伝えない限りは、なかなか他人には理解できないからな...。」

それを訊く事さえ叶わないのが、もどかしいといった感じで、はるかの瞳には秀樹の表情が曇ったように映った。戸惑うはるかに、意外な秀樹の言葉が聞こえて来た。

「ただ...この前のまゆみを見る限り、優しくはなくなっていたな。」

「え!?どういう意味？」

「だってそうだろう？正友にあんな乱暴(らんぼう)な事をして…。昔の彼女からは考えられない事をしてた。どんな事情があったかは知らんが、非情な行為だった…あれは弱さの裏返しと言った方がいいのかな。」

「弱さの裏返し？」

「ああ。この前のまゆみを見ていて、俺はそう感じた。ヒステリックと言うか、まるで駄々をこねてる子供みたいな…。精神的に強い人間はあんな事をしたりはしない。不安定で脆(もろ)いからこそ、何かに八つ当たりをして平静を保とうとしているようだったな。」

秀樹は何事も冷静沈着(れいせいちんちゃく)に観察し、常に何かを感じようとしている。はるかもある手法を真似(まね)し、秀樹の助言から、自分の進むべき道を見出そうとしていた。そんなはるかから、今度は逆に、秀樹が「はっ」とする言葉が返って来た。

「その心の弱さが力を失わせた原因かも知れないわね。」

「!?…そうかもな。だが、何故そう思ったんだ？」

「お兄ちゃんの話しぶりからかな。」

「と言うと？」

「弱いってコトは、何かが壊れたってコトじゃないかなって思って…。例えば、病気は体のどこかが悪くなったからなるでしょ。それと同じで、お兄ちゃんの言う“弱さ”というのは、病気になったら健康な人のように生活出来ないように、力を扱う資格を失う負の要素なのかなって…例えば悪かったかしら…?」

秀樹が暗くなったような気がしたので、はるかは自信なさそうに最後にそう付け足したが。

「いや、言いたい事はよく分かる。お前が自分で俺の話しを理解したんで驚いただけだ。」

と、素直にはるかの成長に驚いた事を秀樹は明かした。そして、はるかの話しに更に補足(ほそく)を加えだした。

「フェニックス心拳の聖なる力は、その力に見合う“心”を失った時に、手元から離れていってしまう。全ての武道(ぶどう)の真髄(しんずい)は、自分の体を鍛え、自分の人格を高める事を命題としてるが。とりわけフェニックス心拳には、それが最も重要な要素となってるのは前にも説明したよな？野原に咲く花でさえ、激しい風雨や寒暖に、メゲる事なく耐えてこそ美しく咲ける。“強さ”とはそんなたくましさと言うんだ。武道における強さとは、最終的には人として強くたくましく生きていける強い心を目指している。なら弱さとは何か？正にお前が今言った通り。心の強さを失ってしまった事なんだ。どんな理由でその強さを失ったのか分かんが、健全な精神を失ってしまったんだ。病(や)んだ心は一部であっても、やがて心の全体を蝕(むしば)み良心を暗く閉ざしてしまう。善悪の区別もつかなくなった者が辿る道。つまりは、盲目(もうもく)となった心が分別のない行動を取った時、道を踏み外した者となる。簡単に言えば、自暴自棄(じぼうじき)になった人間が犯罪意識に目覚めたとしても、思ってるだけなら何でもないが、意識をじかに行動に移せば、犯罪者となるような物だ。心の選択と行動の結果の因果関係から結論づけると、まゆみの件は、以上の事からも分かるように何かの要素で伝承者としての資格である“心”を失ったと考えられる。」

「...まゆみお姉さんは、自分が間違った選択をしたって気づいてるのかな？」

「...さあな。でも彼女は、はるかの記憶通り聡明(そうめい)な女だから分かってるんじゃないのか。」

「...分かってて、止められなかったの？」

「心や感情の問題は、一言で片付けたり割り切れたり出来る物じゃないからな。理屈じゃ分かってても、心が従えないなんて幾らでもある。頭の良い悪いは関係ない...。だが、何故ひと言、俺に相談をしてくれなかったのか、それが残念でならない。」

秀樹はそう言って、とても哀しそうな瞳(め)をした。はるかは気まずくなり、黙ってしまった。しかし、少し間を置くと、様々な想いを断ち切るかのように、きりりとした表情で秀樹は再び話しを شدした。

「“強さ”の意味が分かったか？はるか。」

「なんとなくは...。」

「今はそんな所だろうな。だが何も心配する事はない。お前ならやれる。難しい選択を迫られる時が来るだろうが、常に相手を想う“優しさ”。それを忘れる事がなければ、道を踏み外したりはしない。分かったな！」

「うん、分かった。」

「まゆみは、その優しさを失った。端的に言えばそういう事だ。自分一人苦しんで...そしてその苦しきから逃げた。どんな苦悩を受けてそうなったのか。そんな事は分からんが、どんな状況であっても“優しさ”を忘れてはいけない。お前だって、今日こうしてられるのは、鮎吉師匠や色んな人達の愛情があったからやって来られたんだ。人は決して自分一人で生きてる訳じゃなく、色んな愛情を受けて生きてるんだ。どんな悩みや苦しみであっても、その事が念頭(ねんとう)にあれば乗り越えられると俺は考えてる。実際に、俺はそうしてきたしな。強い心とは、たくましく美しく、利他的(りたてき)でもあり清くもある。その関連性が分かればいい。そして、その強い心の根幹(こんかん)を成(な)すのが“優しさ”だ。人から受ける優しさが愛情で、人に与えるのが優しさだ。人は愛から生まれ、愛を受けて育つ。だから自分も他に愛情を持って接しなければいけない。弱さとは、その対極の心。攻撃的で悲情、一人よがりで醜(みにくい)心と言う。この関係だけを知ってれば、道を誤らずにいられるんじゃないだろうか...さ、堅苦しい話しはこのくらいにして、もう時間も遅いから出よう。」

秀樹が散会(さんかい)をほのめかすと、遊び足りない正友がもう少し居ようと帰路に着くのを渋(しぶ)った。

「ほんと子供なんだから...。」

そう言って呆れるはるかだが、何故か秀樹は正友には寛大(かんだい)で、翌日の土曜日を皆で遊びに出かける約束で妥協(だきょう)するように悟(さと)した。

「んで、ドコ行くん？」

「そうだなあ...海ガメでも見に行くか？」

遊びと聞いて嬉しそうな正友に秀樹はそう答え、その夜を終える事とした。

翌日一

昨晚のカラオケに参加していなかった者も刈(か)り出し、一行は日和佐(ひわさ)の大浜(おおはま)海岸(かいがん)を目指した。

「はるか。覚えてるか？」

道中の車内で、秀樹が含(ふく)みを持たせた言い方をするので。

「え!?...何が...？」

と、はるかはドキドキしながら、そう尋ね返した。

「大浜海岸に、昔に来た時の事だよ！」

「え!?どれくらい前に来たの？」

「十年前くらいになるかな。」

「...6、7才くらいかあ...覚えてないな。」

「...だろうな。」

「お兄ちゃんと来たの？」

「ああ。師匠と正友もいたぞ...それにまゆみもいたな。」

「...そうなの。わたし、どうしてた？」

「どうって...可愛かったよ。海ガメに餌(えさ)をあげて喜んでさ。いま思えば、あの頃のお前は今の女優より全然(ぜんぜん)小さかったんだよな。ちょうどあの時の俺が、今のお前くらいの年で...まゆみが今の俺よりちょっと下で...。随分(ずいぶん)と前のようにも感じるが、懐かしくて鮮明に記憶に焼きついているな...」

「十年前のまゆみお姉さんの記憶がほとんどないんだけど、何故かなあ。」

「あの女は、当時は大阪にいたからな。まとまった休暇(きゅうか)くらいにしか、徳島には帰って来なかった。それに結婚もしてたしな。」

「結婚!?!...」

「何をそんなに驚いてるんだ？正友は知ってるよな！」

急に話を振られた正友は、秀樹の話を聞いてなかったようで聞き返した。

「ああ...そう言えば姉さんは結婚してたな。」

まだ小学生の頃の話しをされ、正友は速答できなかったが、よくよく思い出してみると、そうであると認めた。

「...もしかして、お兄ちゃんと結婚してたの？」

昔、付き合っていた二人の過去を知っているはるか、早とちりも手伝って、まさかとは思いますが、そう訊(き)いた。

「それでビックリしてたのか。俺は、当時はまだ高校生だ。それに比べ彼女は社会人だった。だから違う人とだよ。」

秀樹は笑いながらそう答えた。秀樹と違った相手と、まゆみが結婚した事実を知ったはるかだが、それはそれで、少なからずショックを受けていた。

それは、ただ一人の男と女が結婚して別れたとかどうとかいう問題ではなく、ソロモン王の秘宝に係わる人間として、何かのトラブルが生じる発端(ほったん)となった出来事だったのではないかと考えたからである。

その発端となった出来事で受けた傷を修復(しゅうふく)できず、それから後の秀樹との付き合いで、まゆみに聖なる力を扱う資格を失う、決定的な出来事が起こったのではと考えたが、ことそこにまで思いを巡らせると、秀樹に対する自分の個人的な“想い”とが交錯(こうさく)し、切なかった。

「もう昔話はいいだろ？せっかくの休日なんだから、楽しく行こう。」

そんなはるかの気持ちなど、露(つゆ)ほども知らぬ秀樹。だが、はるかも皆の手前、明るく振る舞わざるを得なかった。

一行は到着すると、海亀の進化の歴史や、世界中の様々な種についての資料が展示された博物館を見て回った。

小学生の美優よりもはしゃぎ、先頭を切って博物館をゆく正友。海亀の子供を触らせてくれるという館内アナウンスが流れると、急いでそれが行われる二階へと駆け上がっていった。

「おーい！みんな早く来いよ。」

そう言って声を弾(はず)ませる正友。

「アイツ、何であんなに騒いでるのかしら...。」

そのテンションの高さに、呆れたのを乗り越えた様子のはるか。

「俺が言うのもなんだが...お前はもっとはしゃいだ方がいいんじゃないのか？お前は年の割に落ち着き過ぎてるんだよ。」

秀樹は第三者的に、感じた事をそのまま口にした。

「そんなコト...ないよ。」

そう言って、はるかは秀樹の言葉を打ち消した。

「そんなコトないコトないぞ！冷めてると言うか、はるかはドコか悟りきった風な世界で、一人、腰を据えて冥想(めいそう)してるみたいな所がある。まるで、浮世(うきよ)から離れた仙人のような...何となく日常を生きる中で、自分の心だけ別世界にいるみたいなな。もっとこう...はつらつとした感じっていうか、キャピキャピした感じがだな...」

秀樹の話しの腰を折るかのように、はるかが突然、クスクス笑い出した。

「何がおかしいんだ？」

秀樹の問いに一

「だってお兄ちゃんが“キャピキャピ”だなんて言葉使うなんて...」

と、答えた。

「...ちょっと恥しかったかな。」

「うん。」 イタズラっぽく頷くはるか。

「おい、そりゃないだろ？」

顔を赤らめる秀樹。二人の会話を阻(はば)むように、正友が大きな声でみんなを呼んだ。

「...もう、ホント子供なんだから。あんな大きな声で叫んで...恥ずかしいったらありやしない。」

そう言いながらも、正友の呼びかけに足早に向かったのは、みっともなさがあったからで。なんだかんだ言いながらも、正友のペースに乗せられているはるかであった。

その内、みんなも集まり、意外と軽い海ガメの子供を抱えてワイワイ言っていると。今度は、屋外のプールで、海ガメの餌やりができるとアナウンスがされたので、そちらに向かう事になった。

はるかはもう少し秀樹と話しがしたかったのだが、移動ばかりしているので機会を得られずにいた。

「海ガメって、トロクせえな。」

視力が弱いのだろうか、海ガメは餌を投げても中々うまく口に入れる事が出来ず、正友は物足りなさそうにそう言ったが。すぐに頭を切り換え、ワザと食べにくそうな場所へ餌を投げ、動きの鈍い海ガメをからかい出した。

餌はキャベツの葉で、小さく切り分けられた葉を大きな海ガメが一生懸命に追う姿は、なんとも愛嬌(あいきょう)のある光景であった。そのゆったりとした海ガメの動きを見ている内に、いつの間にかはるかの心は和み、悩み事も消え失せてしまっていた。

その後。砂浜へ降り立つと、男連中と美優はフットサルに興じたしたが、はるかとは沙織は座り込んで話しをしながら海辺を眺(なが)めていた。

海ガメが産卵に来るだけあって、ゴミ一つないキレイな砂浜。その先に広がる海の色は、南国(なんごく)を連想させるかのような美しい翠色(すいしょく)をしていて、潮騒(しおさい)を運び来る風が何とも言えない清涼感(せいりょうかん)を醸(かも)し出していた。

その気持ち良さに、はるかは知らず知らずの内に眠りこけていた。

「ZZZzzz...ハッ!？」

どれくらいの時間が経ったであろうか。空はまだ全然明るかったので、何時間もは経っていないであろうが、随分と長い時間を居眠りしたかのように感じたはるか。

「あっ！おはよー、はるか。」

はるかが起きたのを見て、傍(かたわ)らにいた沙織がそう言った。

「わたし...どれくらい寝てたの？」

「うーんとね...1時間くらいかな。」

「そう...なんか体が軽くなったみたい。」

「ぐっすり寝れたからじゃなーい？」

「そっかあ...ここの所、あんまり寝れなかったからかな。」

「スゴく寝てたよー。いびきとかスゴかったもん、秀樹お兄さんとかビックリしてたよー。」

「えっ!?嘘...?」

「嘘だよ〜♪」

「もう...怒るよ！」

「ハハハ...ゴメンなさい〜♪」

「あ〜あ。なんかずっとこんな時間が続けばいいのになあ...。」

「え〜。ずっとこんな時間が続いたら、退屈だと思うよ〜」

「そうかなあ」

「そうだよ〜」

とりとめもない語らい。大自然の中に身を置くと、自分の抱えてる悩みや問題がとても小さく思え、はるかはいつになく、そんな類の内容のない話しばかりを延々(えんえん)とした。

「はるか。もう帰るけどいいか？」

はるかの前に秀樹がそう言いながら現れた。

「うん」 そう頷くはるか。

「おっ、だいぶん顔色がスツキリしたな。」

はるかの顔を見て、秀樹は嬉しそうにそう言った。

「...どうやら、いい気分転換になったみたいだな。」

「...そうね。頭の中が何故だか分かんないけど、スツキリとしたみたい。」

「そうか。それは良かったな」

「何でなんだろうね...」

「ん!?何がだ...?」

「え!?どうして、こんなにスツキリしたのかなあって思って...。」

「せっかくいいリフレッシュが出来たんだから、それがどうしてなのかとかまで、考えなくてもいいじゃないか。」

「それは...そうだね。」

「じゃ、もう行こうか。」

秀樹はそう言い、一行は近くの足湯へと向かった。足湯へ着くと、すぐそばの蛇口(じゃぐち)で足を洗い、それから湯船に足を浸した。

「あつたまるねー。」

10分ほどの入浴(にゆうよく)でそう言う沙織は、もう汗(あせ)をかき出していた。

「汗出るの早いね。」

少し驚いた様子のはるか。

「そーお？」

「みんな、まだ全然あつたまつてないよ。」

「そっかー。私、熱がり屋だからかなー。」

前方にそびえる大きな山を眺めながら、ここでものんびりと何気ない話をしていた。

「あ〜っ。秀樹お兄さんが寝てる。」

沙織の言葉に、はるかが秀樹を見ると。学校の授業中の居眠りのような体勢で、秀樹が足湯のテーブルの上で眠っていた。

「...お兄ちゃん疲れてるのかな。」

「気持ちイイからじゃなーい？あ、でも昨日は仕事が忙しかったって言ってたなー。」

はるかの言葉にそう応えた沙織。秀樹の眠りを妨げたくないなので、はるかは会話のトーンを少し下げた。時折、正友と美優がフザけたりもしたが。その都度(つど)、はるかが二人を黙らせ、30分ほどの時間がおおむね静かに流れた。

「！？...いつの間に寝てたんだろ...」

「おはよ、お兄ちゃん。」

ボーッとしている秀樹に、はるかがそう声を掛け優しく微笑んだ。

「...!？」

秀樹は何かに驚いたような顔をした。

「どうしたのお兄ちゃん??？」

「い、いや...一瞬、お前の笑顔がまゆみの顔とダブッて見えて...。全然似てないのにな。」

戸惑う秀樹。だが秀樹以上に、はるかの方がその言葉にショックを受けているようであった。

「ん!?どうしたんだ？」

今度は秀樹が、狼狽(ろうばい)するはるかにそう訊き返した。

「...ううん、何でもないわ。」

自分の好きな人に違う女性と見間違えられ、その上、その女性が前の恋人であったのはショックであったが。この場で不快感を示す訳にもいかず、はるかはそう嘘をつくのが精いっぱいであった。

「秀さん、よっぽど疲れてんだな。」

はるか秀樹が黙り込んでいるのを見て、正友が秀樹の代弁(だいべん)をするかのように、二人の方を見てそう言った。

「ちょっと寝不足だったかな...。」

秀樹はそう言い、大きく欠伸(あくび)をした。

「どれくらい寝たん？」

「二時間...かな。」

「二時間!?...そりゃ眠いわな。でも何やってたのさ？」

「今日は出掛けるって言ったから、車を洗ったり、後は弁当を作ったりだな。まあ色々やってたんだよ。」

「弁当作ってたん？んなの、コンビニで買えばいいのによオ...。そりゃ秀さんの弁当は美味しいけどよ。普段いそがしいのに、たまには楽すりゃいいじゃん」

「じゃあ、お前はコンビニの弁当を食べろよ。」

「も〜う...意地悪言わないでくれよ〜。」

「ハハハ...冗談だよ。体も温まった事だし、そろそろ出ようか。」

秀樹はそう言い、一行は昼食を取るべく近くの四阿(あずまや)に向かった。足を温めただけであるのに、全身がほくほくし、体が軽くなるのを感じたはるかだが、さっきの秀樹の言葉が引っ掛かり、心の方は重くあった。

「はるかちゃん、元気出してね。」

「えっ!？」

はるか達の一行に加わっていたが、あまり目立った発言もしなかった功一が、そう言ってはるかの肩を優しく叩(たた)いた。

はるかには、その言葉の意味がよく分からないようであったが。功一は、はるかの心の動きをよく観察していて、落ち込んでいると見たので励ましたつもりであった。

自分からは何も言った訳ではないが、気持ちを察してくれる人がいたのだなと思い、はるかは少し救われていた。功一は、眉山で共に修業をした時。はるかが秀樹に対し、尊敬意外の感情を持っている事に何となく気付いているだけに、余計にはるかの落ち込みようが伝わっていたようであった。しかし、はるかの一瞬見せた驚きの表情に、それ以上は何も言えずにいた。

「秀さんの卵焼きはウメえな。」

テーブルに広げられた弁当。正友が好物の卵焼きを頬張(ほおば)ると、そう言ってニンマリとした。

「お前は好きな物ばかり食べ過ぎだから、ちょっとは野菜も食べろ。」

そう言って、秀樹は飾り物のように、おかず同士の間挟まった生野菜ばかりを、重点的によそって正友に差し出した。

「うげっ!?これ喰うの？」

「俺がよそった物が食べられないのか？」

露骨に嫌がる正友に、秀樹がそう迫ると一

「そりゃないよ...。」

と、泣きを入れながらも、黙って正友は生野菜を食べ出した。

「偉(えら)いでちゅねー♪マーくん。」

秀樹がそう言って正友をからかった。その光景に全員が笑い出し、はるかもつられて笑ってしまった。

「おっ!?はるかが笑ったな。」

はるかを見て、秀樹がそう言った。

「えっ!?わたしが笑うと変かな...。」

「そういう意味じゃないさ。さっきから暗かったり明るかったりしてるから、何かあったんじゃないかと、浮き沈みする度に思ってたんだが。そんな感じで笑えるんなら心配ないなと思ってな。」

さっき功一が自分を心配して声をかけてくれたが、秀樹も口には出さないが、自分を思ってくれてるのだと知ると、はるかは嬉しくなり—

「そうなの...ありがとう。」

と、満面の笑顔で秀樹に感謝を表した。

「別にそこまで感謝される事はしてないつもりだが...何かフツ切れたようだな。」

「うん。もう大丈夫。」

「...そうか。何を悩んでたのか知らないが、何事も自分で判断するんだ！どうしても分からないのであれば、それについては誰かに相談するといい。」

「うん。分かったわ。」

その会話に正友が、

「何か悩んでたのか？」

と、質問を投げかけた。

「それは...。」

返答に困るはるか。

「はは一ん。さては恋の悩みか？」

「...なワケないでしょ！」

「そんな照れなくてもいいじゃんかよ。ほれ、言ってみろよ。お兄さんが相談に乗って進ぜよう。」

まさかの正友の言葉に、はるかは強く否定したのだが。声の上ずった感じを読み取った正友が、自分にはるかが好意を寄せてるんじゃないのかと勘違いしたのか。鼻高々にそう言ったのだが...

「そんなんじゃないって言ってるのに、馬っ鹿じゃないの。」

と、バツサリと斬り捨てられた。

「もう言い争いは止めろ！」

見かねて二人を黙らせようとする秀樹。その仕草には昨日の疲れが滲んでいて、面倒を起こさないで欲しいという願望がありありと出ていた。

「ごめんなさい...。」

それを感じたはるか、秀樹の労苦を考え素直に謝ると黙りこんでしまった。しかし、はるかが感じた秀樹の疲れた仕草には、困惑の感情が込められている事までは気付けないでいた。

はるかとは正友には、もう少しお互いが大人になって仲良くして欲しいという思いが秀樹にはあって、それが願いとは真逆の形となった事に対する戸惑いの感情があったのだが。はるかはそこまでは理解できないでいた。

秀樹は互いに手を取りあってチームとしての連携を深めるのは勿論(もちろん)の事。それ以上の“関係”にまで二人が発展して欲しいという思いさえあったが、そんな事まで考えてるとは、想像もつかないでいるはるかであった。

「...そんなに神妙(しんみょう)にされても気の毒だから、ヤメてくれないか。俺はお前に楽しんで欲しいんだから...ワザワザこんな自然の綺麗な所まで来て、つまらない口論をするまでもないと思って言っただけなんだからな。」

お手製の弁当に加え、段取りから車の運転に至るまで。忙しい中、世話をしてくれたのは、自分を楽しませる為なのだと言ってくれた秀樹の言葉に、はるかはすっかり気を良くし、明るさを再び取り戻していた。

「ありがとう。お兄ちゃん...」

「いや、そんな感謝されるほどの事は、何もしてないつもりなんだが...。」

「ううん、そんな事ないよ。こんなに美味しいお弁当を作ってくれたり...。でも、お兄ちゃんは昔からだけど、どうしてあんまり眠らないの？」

「時間ももったいなくてな...。」

「もったいない?...」

「ああ。人間の寿命(じゅみょう)は限られている。その中でも一番楽しい時が、十代・二十代だと俺は思う。それが一日一日減ってくと思うと、何だかのんびりする気になれなくてな...ついついオーバーワーク気味になってしまうんだ。自分でも、“何を俺はそんなに生き急いでるんだろう？”って、時々、思ってしまうくらいなんだけどな。まあ、俺はせっかちなんだろうな。」

「...そんな事ないよ。お兄ちゃんの話話を聞いてると、私なんかまだまだだっけ思う。わたしはお兄ちゃんみたいに、毎日を大事に思いながら生きているかなあって。」

「そんな大それた物じゃないさ。俺は貧乏症(びんぼうしょう)なだけさ。」

そんなやりとりを冷やかすように、

「空いてる時間に小銭稼ぎたいなって思ってたんだろ？秀さん。」

と、正友が口を挟んだ。

「そうそう。タイムイズマネー...って、正友！！」

クールな秀樹が珍しく見せた乗りツッコミに、一同は爆笑していた。そんな正友に、はるかが強烈な皮肉を浴びせた。

「小銭稼ぎだって何だっていいじゃない。スチュワーデスさんと合コンしようとか、そんな事ばかり考えてる人より、1億2千万倍マシよ！」

「また昔の事を...」

「昔って、ついこの間じゃない。」

「あれは情報収集の一環(いっかん)なんだよ。」

「“アンタの個人的趣味の”でしょ？」

「そうなんだよ。制服マニアのオレとしては...ッて、んなワケねえだろ！」

「どうだか。」

「違ッ...。秀さん、何とか言ってやってくれよ。」

「制服マニアについてか？」

と、イタズラっぽく言う秀樹。

「違うよ!!ドコをどう取ったら、そういうコトになるんだよ！あ～...オレって、なんでこんなにイジメられるんだろ...。」

「ハハハハ...冗談だよ。ところで、氷の一族について何か情報は得られたのか？」

「あ～...そうだ。言うの忘れてたわ。」

「おいおい。それを忘れてたら、皆から誤解を受けてもしょうがないだろ！...それとも、本当に制服を着た女の子が好きで、そっちと出会うのが目的で合コンやったりしてるのか？」

「違うっつーの！...ま、いいや。あのさ、剣次(けんじ)ってヤツの素性に関する情報なんだけどさ。津田(つだ)の木工(もっこう)団地(だんち)って、秀さん、知ってるよな？」

「ああ...知ってる。」

「そこでよ。凄い資金力を持った企業があつてよ。剣次ってヤツが、どうもその企業を運営してたみたいなんだ。」

「どんな企業なんだ？」

「表向きはバイオ研究っていう、よく分かんねえ肩書きなんだけどな。生物兵器を作ってたみたいだぜ。」

「バイオ研究で培(つちか)ったノウハウを元に、ビッグフードなどの太古の生物兵器を復活させたと言ったところか。」

「多分な。」

「資金は貯まるし、戦争の道具は出来るし、本当に便利な事だな。」

「ああ。それで噂を確かめに行こうと思って、その企業に乗り込んだんだけどさ。行ったらもぬけの殻でさ。そっからは消息が掴めなくてよオ。」

「...そうか。いや、失礼なコト言って悪かったな。」

「???...何が？」

「いや、さっきダークエンジェルズの情報なんてロクに調べてなくて、ただ単に合コンばかりやってんじゃないかなんて言ってしまったからな。」

「いや～オレも言うの忘れてたしさ。気にする事ないよ。秀さん！」

秀樹の言葉に気をよくした正友は、そう言って少し偉そうにした。

「そうやってすぐにチョーシに乗るんだから、お兄ちゃんもこんなのを簡単に褒めちゃダメよ。」

「“こんなの”って何だよ。」

自慢(じまん)気(げ)な正友を、すぐさまそう揶揄(やゆ)するはるか。売り言葉に買い言葉の口論が始まるのかと思いきや、秀樹が今度は先手を打って止めに入ったので、エスカレートせずに済んでしまっていた。

止めはしたものの、ついさき程、お互いを尊重するように悟したつもりなのに、言ったそばから非難し合うはるか正友の二人を見て、秀樹は頭を抱えていた。

～次章へつづく～

バトルボーラーはるか
第三集 氷の美少女
第4章・記憶

<http://p.booklog.jp/book/64754>

著者：Ψ(Eternity Flame)英 樹 (はなぶさ いつき)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile>

ブログ：<http://profile.ameba.jp/jjmmd123/>

編集、更新：Ψ(Eternity Flame) 秋乃空(あきのそら)

ブログ：<http://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/>

感想はこちらのコメントか秋乃空のブログへお気軽にお願いします

<http://p.booklog.jp/book/64754>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64754>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ